

郡大呑口に出張放火したるを賞せられたるを謝す。

【吉江文書】 羽前

一五八五

去朔日之御書、同四日謹而頂戴、仍大呑口働、各早速罷出致放火旨、御喜悅之由被仰出候。則御書各爲致拜見候處、冥嘉至極由何茂申候。就中御一左右之内、當郡在陣之儀奉得其意旨申事候。於様体者林邊致見聞候間、可申上旨宜預御披露候、恐々謹言。

鏝坂備中守

六月八日

長 實 在判

吉江織部佑

景 資 在判

河田豊前守

長 親 在判

(この文書末尾を闕く。案ずるに吉江喜四郎宛なるべし。その鹿島郡大呑口に侵入したるは越中氷見庄よりせしにあらざるか。)

閏七月八日。上杉謙信、飛驒江馬輝盛の臣河上定次に、その能登を征せんとして越中魚津に至り、織田信長北向の風聞を得たることを報す。

【河上文書】

一五八六

態用一翰候。仍能州爲調儀、當地至魚津出馬候。然處信長出張之由申廻候間、累年之望此節ニ候間、無二可付實否由令覺悟候。年來申合首尾此時候間、其口出様ケ間敷候。去年如約、一際輝盛馳走候様諷諭任入候。諸口於擬者可心安候。猶節々様子珍儀、委可被申越候。目出重而謹言。

壬辰五年

謙 信

河上強内殿

(傍註のイは古蹟文徴に據る。そのうちに却りて是なるものあるに似たり。)

【歴代古案】

一五八七

御書畏而致拜見候。抑能州爲御調儀被出御馬旨輝盛

へ御札、則御報被申候。此刻能州可應御下知與珍重奉存候。次上表之事仰候。賀州筋へ可有行様ニ申成候。如何與存知置候處、去五日ニ信長京上之旨慥承候。然上者指

義御坐有間敷候。輝盛儀如前々聊不被存疎意候間、不替御芳意可忝候。上方珍説候に付而者可申上候趣、可預御披露候。恐々謹言。

閏五月十六日

定 次

河 田 殿

八月九日。上杉謙信能登に在り、織田氏の軍北進の報を得て、七里頼周に能美郡御幸塚を固守せしむ。

【水野文書】 尾張

一五八八

如注進者、至于其國信長出張之段申廻候哉。就之出勢之儀被申越候。幾度如申、北國之備與云、大坂に之屆與云、於謙信此度も表裏見除有間敷候。至于其儀者、重而之依一左右末守お可打上候。彼筋火手可被爲見置候。兎角ニ御幸塚普請幸ニ候間、國衆同心堅固ニ被相抱肝心

候。彼地被打明候而者比與ニ候。謙信打著間之備候間、油斷有間敷候。爲其成福院相頼、河田實清軒差添越候條、入魂候而國衆に被申斷尤候。目出吉左右待入候。恐々謹言。

八月九日

謙 信 在判

七里三河法橋房

九月十四日。金澤御坊の下間頼純、堀才介に、その能美郡粟津口に於いて織田氏の軍と戦ひたる功を賞す。

【北徴遺文】

一五八九

於粟津口遂ニ一戰、首一被討捕之由、御高名無比類次第候。彌向後可被抽粉骨事肝要候。馳走之通具可被言上候。謹言。

九月十四日

侍従法橋 頼 純 在判

宇 丹 内

堀 才 介 殿